

訴 状

平成 27 年 1 月 26 日

東京地方裁判所 御中

原告ら訴訟代理人

弁 護 士 高 池 勝 彦

弁 護 士 荒 木 田 修

弁 護 士 稻 澤 優

弁 護 士 尾 崎 幸 廣

弁 護 士 小 沢 俊 夫

弁 護 士 田 中 平 八

弁 護 士 田 中 禎 人

弁 護 士 田 辺 善 彦

弁 護 士 辻 美 紀

弁 護 士 中 島 繁 樹

弁 護 士 二 村 豈 則

弁 護 士 馬 場 正 裕

弁 護 士 浜 田 正 夫

弁 護 士 原 洋 司

弁 護 士 藤 野 義 昭

弁 護 士 牧 野 芳 樹

弁 護 士 増 田 次 郎

弁 護 士 松 本 藤 一

弁 護 士 三 ツ 角 直 正

弁 護 士 森 統 一

弁 護 士 山 口 達 視

弁 護 士 山 崎 和 成

弁 護 士 横 山 賢 司

別紙原告訴訟代理人目録のとおり

当事者の表示

原 告 ら

別紙原告目録のとおり

被 告

〒530-8211 大阪市北区中之島二丁目3番18号
株式会社朝日新聞社（本店）

〒104-8011 東京都中央区築地五丁目3番2号
株式会社朝日新聞社（支店）
上記代表者代表取締役 渡辺 雅隆

損害賠償請求事件

訴訟物の価額	金1億0284万5000円
貼用印紙額	金32万9000円
予納郵券	金 6000円

請求の趣旨

- 1 被告は、原告らに対し、本判決確定の日から7日以内に別紙記載の内容の謝罪広告を朝日新聞（全国版）の朝刊社会面に別紙に記載した条件で1回掲載せよ。
- 2 被告は、原告らに対し、それぞれ金1万円及びこれに対する本訴状送達の日から支払い済みまで年5分の割合による金員を支払え。
- 3 訴訟費用は被告の負担とする。
- 4 第2項につき仮執行宣言

請求の原因

第1 当事者

1 原告は

渡部昇一（上智大学名誉教授）（原告団長）

浅野久美（ライター）

阿羅健一（近現代史研究家）

井尻千男（拓殖大学名誉教授）

梅原克彦（前仙台市長）

大高未貴（ジャーナリスト）こと鈴木美貴
小川榮太郎(文芸評論家)
小田村四郎（元拓殖大学総長）
小山和伸（神奈川大学教授）
鍛冶俊樹（軍事ジャーナリスト）
加瀬英明（外交評論家）
葛城奈海（女優・予備三等陸曹）
上島嘉郎（元産経新聞社 雑誌「正論」編集長・ジャーナリスト）
川村純彦（元海将補）
クライン孝子（ノンフィクション作家）
小林正（教育評論家・元参議院議員）
小堀桂一郎（東京大学名誉教授）
佐藤守（元空将）
佐波優子（戦後問題ジャーナリスト）
杉原誠四郎（新しい歴史教科書をつくる会会長）
すぎやまこういち（作曲家）こと梶山浩一
関岡英之（ノンフィクション作家）
高清水有子（皇室ジャーナリスト）
高山正之（ジャーナリスト）
田中英道（東北大学名誉教授）
田母神俊雄（元航空幕僚長）
椿原泰夫(「頑張れ日本！全国行動委員会」福井県支部相談役・京都府本部 顧問)

頭山興助（呉竹会会長）
富岡幸一郎（文芸評論家・関東学院大学教授）
永山英樹（「台湾研究フォーラム」会長）
西尾幹二（評論家）
西村幸祐（作家・ジャーナリスト）
濱口和久（拓殖大学日本文化研究所客員教授）
藤岡信勝（拓殖大学客員教授）
本郷美則（元朝日新聞研修所長・時事評論家）

松浦光修（皇学館大学教授）

松本國俊（朝鮮問題研究家）

馬淵睦夫（元駐ウクライナ兼モルドバ大使）

三浦小太郎（評論家）

水島総（株式会社日本文化チャンネル桜代表・頑張り日本！全国行動委員会
幹事長

水間政憲（ジャーナリスト）

三橋貴明（「経世論研究所」所長・中小企業診断士）こと中村貴司

宮崎正弘（作家・評論家）

三輪和雄（「日本世論の会」会長・「正論の会」代表）

村田春樹（「自治基本条例に反対する市民の会」会長）

室谷克実（評論家）

目良浩一（南カリフォルニア大学教授）

山本皓一（フォトジャーナリスト）

山本優美子（「なでしこアクション」代表）

柚原正敬（「日本李登輝友の会」常務理事）

杉田水脈（前衆議院議員）

田沼隆志（前衆議院議員）

長尾敬（衆議院議員）

中丸啓（前衆議院議員）

中山成彬（前衆議院議員）

西川京子（前衆議院議員）

西村眞悟（前衆議院議員）

三宅博（前衆議院議員）

阿部利基（宮城県石巻市議会議員）

犬伏秀一（前東京都大田区議会議員）

植松和子（静岡県函南町議会議員）

江花圭司（福島県喜多方市議会議員）

大瀬康介（東京都墨田区議会議員）

小坂英二（東京都荒川区議会議員）

小島健一（神奈川県議会議員）

小菅基司（神奈川県秦野市議会議員）
小坪慎也（福岡県行橋市議会議員）
桜井秀三（千葉県松戸市議会議員）
鈴木正人（埼玉県議会議員）
土屋敬之（前東京都議会議員）
松浦芳子（東京都杉並区議会議員）
三井田孝欧（新潟県柏崎市議会議員）
吉田康一郎（前東京都議会議員）

ら合計 8749 名の被告株式会社朝日新聞社の虚報により名誉と信用を毀損された日本国民である。

2 被告株式会社朝日新聞社（以下「朝日新聞」という）は、

「不偏不党の地に立って言論の自由を貫き、民主国家の完成と世界平和の確立に寄与す。

正義人道に基いて国民の幸福に献身し、一切の不法と暴力を排して腐敗と闘う。眞実を公正敏速に報道し、評論は進歩的精神を持してその中正を期す。

常に寛容の心を忘れず、品位と責任を重んじ、清新にして重厚の風をたつとぶ。」

を綱領とする発行部数約 700 万部を誇る新聞社である。

第 2 加害行為

1 朝日新聞は、そもそも、創刊以来、「不偏不党」であったことはない。眞実を公正に報道してきたとは言い難い。「責任を重んじ」てきたともいえない。

朝日新聞のこれまでの偏向と誤報・虚報の例は枚挙にいとまがない。その意味で、上記朝日新聞綱領は、一つのブラックユーモアである。

朝日新聞は、戦後、一貫して、社会主義幻想に取りつかれ、反日自虐のイデオロギーに骨絡みとなり、日本の新聞であるにもかかわらず、祖国を呪詛し、明治維新以来の日本近代史において、日本の独立と近代化のために涙ぐましい努力をしてきた先人を辱めることに躊躇することはない。旧軍の将兵を辱める

ときは、ことさらそうである。実際のところ、明治の建軍以来、日本の軍隊は、国際法を遵守し、世界で最も軍律が厳しく道義が高かったにもかかわらずである。客観報道・事実の報道をするわけではなく、国論の分かれる問題については、「報道」ではなく「キャンペーン」を張るのが常であった。朝日新聞は、これまで、クオリティーペーパー（高級紙）社会の木鐸などというもおこがましく、国家・国民を誤導してきたものである。

- 2 朝日新聞は、次の各年月日発行の紙面にそれぞれ次の見出しを附した記事を掲載した。すなわち、

昭和 57 年（1982 年）9 月 2 日朝刊 大阪本社版

「朝鮮の女性 私も連行 暴行を加え無理やり」

昭和 58 年（1983 年）10 月 19 日夕刊

「韓国の丘に断罪の碑 『徴用の鬼』いま建立」

昭和 58 年（1983 年）11 月 10 日朝刊

「ひと 吉田清治さん」

昭和 58 年（1983 年）12 月 24 日朝刊

「たった一人の謝罪 韓国で『碑』除幕式」

昭和 61 年（1986 年）7 月 9 日朝刊

「アジアの戦争犠牲者を追悼 8 月 15 日、タイと大阪で集会」

平成 2 年（1990 年）6 月 19 日朝刊 大阪本社版

「名簿を私は焼いた 知事の命令で証拠隠滅」

平成 3 年（1991 年）10 月 10 日朝刊 大阪本社版

「女たちの太平洋戦争 従軍慰安婦 加害者側から再び証言」

平成 4 年（1992 年）1 月 23 日夕刊

「窓 論説委員室から 従軍慰安婦」

平成 4 年（1992 年）3 月 3 日夕刊

「窓 論説委員室から 歴史のために」

平成 4 年（1992 年）5 月 24 日朝刊

「今こそ自ら謝りたい 連行の証言者、7 月訪韓」

平成 4 年（1992 年）8 月 13 日朝刊

「元慰安婦に謝罪 ソウルで吉田さん」

平成6年(1994年)1月25日朝刊

「政治動かした調査報道 戦後補償 忘れられた人達に光」

平成3年(1991年)8月11日朝刊 大阪本社版

「思い出すと今も涙」

である。

そして、上記各記事の記述内容は、別紙朝日新聞虚報目録 ないし (以下「本件一連の虚報」という)のとおりである。

- 3 先ずは、朝日新聞的思い入れたっぶりの表現で綴られた本件一連の虚報を通読されたい。赤面するか憤るか、驚倒すべきことに、有り体にいうと、これが全部嘘なのである。

上記 ないし の各記事は、素性も定かではない故吉田清治なる詐話師の言動に基づくもので、同人の証言(以下「吉田証言」という)は全くの作り話、嘘言であった。

- 4 次に、これまた思い入れたっぶりの「思い出すと今も涙」の元朝日新聞記者植村隆の記事についてである(別紙朝日新聞虚報目録)(以下「植村報道」という)。

「女子挺身隊の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた朝鮮人従軍慰安婦」の重い口が開いたというのである。

しかし、そもそも、女子挺身隊の名で戦場に連行された従軍慰安婦ということとはあり得ず、これまた完全な虚報である。

- 5 かくして、ここに、加害者側の吉田証言報道と被害者側の植村報道が出そろったことにより、「慰安婦強制連行」の虚構の構図が完成したのである。

第3 朝日新聞虚偽報道が招来した恐るべき事態

- 1 我々は、先ず、事の本質を確認しなければならない。世上にかまびすしいいわゆる「慰安婦問題」の本質についてである。慰安婦は日本の官憲により強制連行されたのかである。つまり、日本の官憲による強制連行の有無こそ慰安婦問題の本質なのである。なぜなら、日本の官憲による強制連行がないのであれば、それは、古今東西の売春問題一般に帰着し、ことさら「従軍慰安婦」ある

いは「性奴隷」などのおどろおどろしい名称を附して問題にする根拠を失うからである。

しかるところ、いわゆる「従軍慰安婦」については、今日に至るまで、日本の官憲が強制連行したという検証された一片の証拠もあがっていない。官憲による強制連行の事実がないのであるから、当然ながら今後も証拠が出てくることはない。永遠にない。

したがって、別紙朝日新聞虚報目録記載の記事が朝日新聞の自認により虚報であることが明らかになった時点で、「慰安婦問題は終わった」のである。強制連行はなくとも「強制性」があっただの「女性の人権問題」であるなどというのは、問題のすりかえ以外の何ものでもない。

- 2 朝日新聞の本件一連の虚報は、多くの海外メディアにより転電され、「日本軍に組織的に強制連行された慰安婦」というねじ曲げられた歴史を国際社会に広汎に拡散させ、戦後 70 年を経た現在も、わが国がことさら激しい故なき非難を浴びる原因になっている。

- 3 国連人権委員会が平成 8 年（1996 年）採択した有名な「クマラスワミ報告」は、慰安婦問題を巡る日本の立場に対する国際社会の事実誤認の決定的なきっかけとなっている。

同報告の中核となっているのは、日本軍が国家総動員法の下で、若い女性たちを女子挺身隊として強制連行し、性奴隷として働かせたという荒唐無稽なストーリーになっているのである。

平成 10 年（1998 年）の国連マクドゥーガル報告書のストーリーも、平成 19 年（2007 年）の米下院決議 121 号のストーリーも、上記同断である。

- 4 そして、世界の慰安婦像である。在ソウル日本大使館前、アメリカ合衆国、オーストラリアと世界中に慰安婦像が建てられあるいは建てられつつある。

平成 25 年（2013 年）7 月 30 日除幕式が行われたロスアンゼルス近郊のグレンデール市の公園に設置された有名な少女像の脇には、「平和のモニュメント」と題した次の碑文が刻み込まれている。すなわち

「1932 年から 45 年までの間、日本の帝国軍により、韓国や中国、台湾、日本、フィリピン、タイ、ベトナム、マレーシア、東ティモール、インド

ネシアの家々から引き離され、性奴隷を強制された 20 万人以上のアジアとオランダの女性を追悼して」

と。

一体、何の話であるのか。

- 5 かくして、日本の旧軍将兵たちは、アジア各地で多くの女性を強制連行し、性奴隷として野蛮な集団強姦をした犯罪者集団であるとの汚名を着せられたのである。

そして、旧軍将兵らはもとより、原告らを含む誇りある日本国民は、その集団強姦犯人の子孫との濡れ衣を着せられ、筆舌に尽くし難い屈辱を受けている。原告らを含む日本国民は、本件一連の虚報以来、朝日新聞の加害行為を現在進行形で受けている。

- 6 最後に、断言したい。「朝日新聞の本件一連の虚報なかりせば、今日の事態は絶対にあり得なかった」と。

第 4 故意・過失

朝日新聞の原告らに対する加害行為は、全く当然の裏づけ取材をしない虚構の報道であり、ほとんど故意に近いものというべく、少なくとも、重過失があることは明らかである。

第 5 損害の発生（被害法益）

- 1 朝日新聞の本件一連の虚報により、日本国及び日本国民の国際的評価は著しく低値し、原告らを含む日本国民の国民的人格権・名誉権は著しく毀損せしめられた。
- 2 しかるに、朝日新聞は、同紙の「読者ら」にお詫びするばかりで、国際社会における日本国の尊厳と原告らを含む日本国民の名誉・信用を回復するために国際社会に向けて何らの真摯な努力をしようとしめない。読者に詫びて、あとは野となれ山となれということであるのか。謝罪広告が必要な所以である。
- 3 朝日新聞の原告らに対する上記著しい侵害により生じた有形無形の損害を填補するには、謝罪広告の掲載だけでは到底不十分であり、原告らが被った被害

の一部として、原告一人に対して、少なくとも金 1 万円の損害金（慰謝料）を支払わせることが相当である。

第 6 結語

以上の次第で、原告らは、被告株式会社朝日新聞社に対し、民法 709 条、723 条に基づき、請求の趣旨記載の損害賠償及び謝罪広告の掲載を求め本訴に及ぶ次第である。

(別紙) 朝日新聞虚報目録

昭和 57 年(1982 年)9 月 2 日 木曜日 朝鮮の女性 私も連行 暴行加え無理矢理 37
年ぶり危機感で沈黙破る

元動員指揮者が証言

関東大震災の混乱の中で、多数の朝鮮人が虐殺されて 59 年目の一日夜、大阪で催された「旧日本軍の侵略を考える市民集会」で、かつての朝鮮人の強制連行の指揮に当たった動員部長が、悲惨な「従軍慰安婦狩り」の実態を証言した。戦後もずっと語られることなく葬られてきた朝鮮人慰安婦の歴史、それをいま、「戦争で中国にいた日本軍兵士で朝鮮人慰安婦と接触しなかった人は一人もいなかったでしょう」と思い口を開く姿に、約 500 人の参加者はしんとして聴き入った。

この人は東京都文京区千石 4 丁目、吉田清治さん(68)。昭和 17 年秋、朝鮮人の徴用を目的に発足した「山口県労務報国会下関支部」の動員部長に就任した。以後 3 年間、十数回にわたり朝鮮半島に行った。直接指揮して日本に強制連行した朝鮮人は約 6000 人、うち 950 人が従軍慰安婦だったという。

この日、大阪・浪速解放会館での集会で演壇に立った吉田さんは「体験したことだけお話しします」といって切り出した。

「朝鮮人慰安婦は陸軍慰問女子挺身隊という名で戦線に送り出しました。当時、われわれは『徴用』といわず『狩り出し』という言葉を使っていました。そして 18 年の初夏の一週間に済州島で 200 人の若い朝鮮人女性を「狩り出した」時の状況が再現された。

朝鮮人男性の抵抗に備えるため完全武装の日本兵 10 人が同行した。集落を見つけると、まず兵士が包囲する。続いて吉田さんの部下 9 人が一斉に突入する。若い女性の手をねじあげ路地にひきずり出す。こうして女性たちはつぎつぎにホ口のついたトラックに押し込められた。連行の途中、兵士たちがホ口の中に飛び込んで集団暴行した。ボタン工場で働いていた女子工員、海岸でアワビを採っていた若い海女……。連日、手当たり次第の「狩り出し」が続いた。

「泣き叫ぶというような生やさしいものではない。船に積み込まれる時には、全員がうつろな目をして廃人のようになっていた。」

約 1 時間、淡々と、ときに苦悩の色をにじませながら話す吉田さんは「かわいそうだ、という感情はなかった。徹底した忠君愛国の教育を受けていたわれわれには、当時、朝鮮民族に対する罪の意識を持っていなかった」と声をふりしぼった。

教科書問題にも吉田さんは触れた。「戦後の日本の歴史教科書はこうした事実がっさい書かれてこなかった。というより、その教科書を改め、戦前の教育に逆行する動きさえあるじゃないですか」。低血圧で時々目まいがするという吉田さんに37年間の沈黙を破らせたのは、こうした歴史の逆流傾向に対する危機感だという。

「日本軍が戦争中、犯したもっとも大きな罪は朝鮮人の慰安婦狩りだった」と話す吉田清治さん=1日夜、大阪市浪速区の浪速解放会館で（キャプション）

朝日新聞虚報目録

昭和 58 年 (1983 年) 10 月 19 日 水曜日 韓国の丘に謝罪の碑 「徴用の鬼」いま建立
悔いる心、現地であかす 東京の吉田さん

12 月初め、韓国中西部の丘で、ひとつの石碑が除幕される。太平洋戦争中、6000 人の朝鮮人を日本に強制連行し、「徴用の鬼」と呼ばれた元山口県労務報国会動員部長、吉田清治さん (70) = 東京都品川区上大崎 2 丁目 = が建立する。望郷の思いを抱いて死んで行った多くの人たちへの謝罪の気持ちが、碑文に込められている。

「あなたは日本の侵略戦争のために徴用され強制連行されて、強制労働の屈辱と苦難の中で、家族を思い、望郷の念も空しく、貴い命を奪われました。私は徴用・強制連行を実行した日本人の一人として死後もあなたの霊の前に排跪 (はいき) 謝罪を続けます 元労務報国会徴用隊長吉田清治」

現在、著述業をしている吉田さんは昭和 17 年夏、郷里の山口県労務報国会下関支部の動員部長、後に県全体の動員部長になった。報国会は国家総動員体制の下で、軍需工場や炭鉱、前線の飛行場建設現場で働く労働者の確保を目的にしていた。

徴用の対象は初めは日本人、次に「内地」にいる朝鮮人、18 年ごろからは朝鮮総督府だけにまかせずに、吉田さんらが直接、朝鮮へ出向いた。軍や警察の協力を得て、田んぼや工場、結婚式場にまで踏み込み、若者たちを木刀や銃剣で手当たり次第に駆り立てた。徴用した 6000 人のうち、約 3 分の 1 は病気などで祖国解放を見ずに死んだ、という。

敗戦直後に旧内務次官から、朝鮮人徴用に関する公式書類の焼却命令が出た。吉田さんも関係書類をすべて処分した。戦後はサラリーマン、団体役員として、過去に目をつぶり生きようとした。が、脳裏に焼きついた記憶までは消せない。若い朝鮮人男女の泣き叫ぶ声、涙が、夢の中に繰り返し現れた。

せめて、わずかな記憶と自分たちの記憶だけでも残そう、と心に決めた。昔の部下たちにも呼びかけたが、「国の命令に従っただけ」「寝た子を起こすことはない」と消極的で、匿名の証言の協力にとどまった。強制連行の過去を暴いた本を 2 冊出版。次に韓国への謝罪の旅と、「日本人の謝罪碑」建立を考えるようになった。

韓国側との橋渡しは、知り合いの蓑順姫・在日本大韓民国婦人会中央本部会長らの協力で順調に進んだ。石碑は 9 月初めから、韓国忠清南道天安市近くの「望郷の丘」で建設が進められ

ている。横 1.2 メートル、たて 0.8 メートル。上にハングル、下に日本語で碑文が刻まれる。

韓国の新聞、テレビではこの話が大きく伝えられ、たどたどしい日本語でつづられた 40 数通の手紙が吉田さんの手元に届いた。いずれも励ましたり、協力を申し出るものばかり。吉田さんの過去を責めるものは 1 通もなかった。

韓国からの励ましの手紙などを繰り返し読み、謝罪の碑への思いをはせる吉田清治さん = 東京都品川区上大崎 2 丁目の自宅で (キャプション)

朝日新聞虚報目録

昭和 58 年 (1983 年) 11 月 10 日

ひと

全国から励ましの手紙や電話が相次いでいる。同じ戦争加害の意識に悩んでいた人、「強制連行、初めて知りました」という中学 3 年生……………。

「でもね、美談なんかではないんです。2 人の息子が成人し、自分も社会の一線を退いた。もうそんなにダメージはないだろう、みたいなものを見定めて公表に踏み切ったんです」

大学卒業後、旧満州国吏員から中華航空に転じた。身元チェックの甘さから、朝鮮人の社会主義者を飛行機に乗せる結果になったことなどが利敵行為に問われる。軍法会議で懲役 2 年。出獄後、下関の親類宅に身を寄せると、特高警察から「罪のつぐないに、労務報国会で働け」と迫られた。

下関は関釜連絡線の玄関口。正規の徴用はもちろん、「実家に仕送りができる」とブローカーにだまされた若者たちが次々に送り込まれてくる。しかし、内務省からは「人員払底の時局がら、取り締まるな」の密命。貨車で炭鉱や土木現場へ送り込んだ。

炭鉱では、逃亡を図った主謀者が木刀でなぶり殺される現場に出くわした。

教科書問題で文部省は「当時は朝鮮半島は日本であり、国民徴用令に沿ったもの」と弁明。この春には旧朝鮮総督府の幹部らが当時のダム建設の記録をまとめた。大会社の重役などに収まるこの人たちは「日本は朝鮮の近代化に貢献した」と、吉田さんを前に胸を張った、という。

「国家による人狩り、としかいいようのない徴用が、わずか 30 数年で、歴史のヤミに葬られようとしている。戦争責任を明確にしない民族は、再び同じ過ちを繰り返すのではないでしようか」

(清田 治史記者)

朝日新聞虚報目録

昭和 58 年 (1983 年) 12 月 24 日 土曜日

たった一人の謝罪

強制連行の吉田さん 韓国で「碑」除幕式

ソウル 23 日 = 清田特派員

第二次大戦中に起きた韓国・朝鮮人強制連行の全容は依然解明されていないが、当時山口県労務報国会動員部長として、その一端にかかわった体験を本に書いた吉田清治さん(71) = 東京都品川区上大崎 2 丁目、目黒西口マンション 2 号館 105 号 = がその印税を投じて建てた「謝罪の碑」が韓国・天安市にでき、23 日除幕式が行われた。式に出席した韓国人関係者は吉田さん個人の志は理解しながらも、責任を回避し続けている日本政府の姿勢に対するやり場のない怒りをぶつけた。日本に連行されたあとサハリンに連れていかれ今も無国籍のまま次々と死んでいっている、と涙で訴える家族もあった。

謝罪碑は韓国海外同胞のための国立墓地「望郷の丘」の最奥部に眠る無縁仏 6000 余柱の合葬墓団地の入り口につくられた。除幕式の司会は、東京地裁で進行中の樺太残留韓国人帰還訴訟の原告団が属す中朝蘇離散家族会(本部・大邱市、4 万 3000 人)。

「私は戦前数多くのあなた方を強制連行した張本人です。すでに 38 年の歳月が流れ、私一人だけのおわびではありますが、自責の念で死ぬにも死ねない気持ちでやってまいりました。祈りのあと、吉田さんは一語一語をかみしめ、建立の趣旨を話し、「あなたは日本の侵略戦争のために徴用され、強制連行されて、強制労働の屈辱と苦難のなかで家族を思い、望郷の念もむなしく貴い命を奪われました……」と碑文を読み上げた。

式のあと、参加者約 3000 人は無念の思いを口々に吉田さんに訴えた。「吉田さん。あなたの行為はよくわかります。勇気ある行為だと思います。でも日本政府は戦後 38 年間何をしてくれたのですか」

ソウルに引き揚げる途中、吉田さんは「韓国の皆さんの無念の気持ちが言葉に表現できないほど深いものであることを痛感させられました。戦争の加害責任をせめて自分の子どもや孫だけには語り継いでいただきたい」と語った。

吉田さんは、国家総動員体制の下で軍需工場や炭鉱などで働く労働力確保のためにつくられた報国会の一員として、自分が指揮しただけで女子隊 950 人を含め 6000 人を徴用した。強制連行の実態を隠すため敗戦のとき関係書類は焼却命令が出されたが、吉田さんは謝罪の意を込めてその体験記を書いた。「朝鮮人慰安婦と日本人」と「私の戦争犯罪」として、出版されている。

サハリン残留韓国人の遺家族を前に土下座する吉田清治さん = 韓国忠清南道天安市の望郷の丘で清田特派員写す (キャプション)

朝日新聞虚報目録

昭和 61 年 (1986 年) 7 月 9 日 水曜日

アジアの戦争犠牲者を追悼 8 月 15 日、タイと大阪で集会

元捕虜・通訳ら参加 体験語り、平和誓い合う

第二次大戦で犠牲になったアジアの人たちを追悼する集会が、終戦記念日の 8 月 15 日、「死の鉄道」で名高い泰緬(たいめん)鉄道の要所、タイ・カンチャナブリと大阪で同時に開かれる。タイでは、鉄道建設で死んだ連合軍捕虜や現地労働者を慰霊するため、元陸軍省通訳が建てたタイ式寺院に、「ロームシャ」と呼ばれた当時の労働者やその遺族らが集まる。大阪では、タイ、韓国、シンガポールなどからの参加者が戦争体験を語り、日本人とともにアジアの平和を誓い合う。

集まりは「アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ、心に刻む集会」

大阪集会は、8 月 15 日午前 10 時から大阪市東区森ノ宮中央 1 丁目のピロティホールで。タイ・カンチャナブリの戦争博物館長ティーパンヤ・スティー師、韓国原爆被害者協会の辛泳洙会長、祖父が日本軍に捕まったまま行方不明となったシンガポールの新聞「南洋・星洲聯合早報」東京特派員の陸培春氏らが日本軍の侵略行為と被害者の感情を証言する。日本側からは、戦争中「山口県労務報国会下関支部」動員部長として、従軍慰安婦を含む朝鮮人の強制連行の指揮に当たった吉田清治さん(72) = 千葉県我孫子市 = が体験を話す。

タイ会場は、映画「戦場にかかる橋」で知られるクワイ河鉄橋のすぐそば。通訳として泰緬鉄道建設にかかわった岡山県倉敷市大島、英語塾経営永瀬隆さん(68)が、私費とタイ人の協

力で今年2月に完成させた「クワイ河平和寺院」に、新たにできる日本式庭園の完成式を兼ねた集会。

現地で今も日本語で残っている「ロームシャ」として鉄道建設に加わったマレーシア人のトム・ユーさん(57)とその家族、元連合行軍捕虜、タイ在住華僑、僧りよらが出席する。日本から永瀬さんと一般募集の約10人が加わる。

今回の催しは昨秋、関西大非常勤講師(日本史)の上杉聡さん(38)が、朝日新聞紙上で「アジアの戦没者遺族を招き、合同慰霊祭を」と呼びかけたのが、きっかけ。上杉さんが中心になって準備を重ね、宇都宮徳馬参院議員、随筆家の岡部伊都子さん、作家の瀬戸内寂聴さんら31人が呼びかけ人になった。

上杉さんは「政府主催の全国戦没者追悼式で申われるのは軍人、軍属と、原爆、空襲による日本人だけ。2000万人を超すといわれるアジアの犠牲者は、一度もまとまって追悼されていない。靖国神社公式参拝などアジアの人を逆なでする動きが強まり、外国人に指摘されないと反省しない」と話している。

タイ集会への参加費用は約25万円。申し込みは集会事務局(06 562 7740)へ。

アジアの戦争犠牲者の追悼集会が開かれるタイ・カンチャナブリの「クワイ河平和寺院」(キャプション)

朝日新聞虚報目録

平成2年(1990年)6月19日

名簿を私は焼いた

知事の命令で証拠隠滅

元動員部長証言

戦前、山口県労務報国会下関支部動員部長として、「徴用」名目で多数の朝鮮人を強制連行した吉田清治さん(76) = 千葉県在住 = が話した。「名簿などの関係書類をドラム缶で焼き、灰はスコップで海に捨てました。敗戦直後の8月下旬のことだった、という。

内務次官の指示に基づき、「記念写真も含め、朝鮮人に関する資料をすべて焼却せよ」とい

う県知事の緊急命令書が、警察署長宛に届いた。吉田さんは丸4日かけて、下関署の裏で、同支部にあった徴用関係書類をドラム缶で焼いた。6000～10000人分の名簿も含まれていた。

「強制連行の実態が明らかになると、関係者は戦犯になりかねない。だから、米軍が来る前に、証拠隠滅を図ったわけです。当時は、自分もそれが当然と思っていました」

労務報国会は、戦時体制の中で、炭鉱などの人手不足を解消するため、昭和17年に全国各県の警察単位につくられ、労務動員を担当した。日本国内には徴用できる人材が少なく、朝鮮人の強制連行が主な仕事だった。吉田さんは敗戦まで約3年間、強制連行の実務責任者として7、8回、朝鮮半島に渡った。

地元警察署員らが集落を包囲したあと、吉田さんらが家の中や畑で作業中の朝鮮人男性を強引に引きずり出し、次々と護送車に乗せた。数百人を下関に連行した後、貨物列車に乗せ、炭鉱などに送り込んだ。

「自分は戦争犯罪人。その罪と責任は死んでも消えないでしょう。強制連行の官庁資料はもはやないと思うが、企業や市町村レベルで、少しでも手がかりがないか、探すべきです」

吉田さんは戦後、炭鉱などで酷使されて死んだ韓国人の遺骨返還運動や、6年前には韓国天安市の「望郷の丘」に私費で「日本人の謝罪碑」を建立するなど、自らの戦争責任を問い続けている。

「同じやり方で多くの朝鮮人女性を従軍慰安婦として連れ去ったこともあります。当時の私は、徴用の鬼、といわれて誇りに思っていました。朝鮮民族の人たちには、死後も謝罪し続けなければならないという気持ちです。到底許されるとは思っていませんが」

考える集い・催し次々と

岡山・大阪・・・各地で広がる関心

従軍慰安婦についての関心が韓国、日本各地で急速に広がっている。韓国挺身隊問題対策協議会共同代表の尹貞玉さん、在日韓国・朝鮮人女性、補償問題に取り組んでいる日本人らの努力によるところが大きい。

9月29日には岡山市内で「戦後補償と朝鮮人従軍慰安婦を考える集い」が開かれ、高木健一弁護士が「アジアに対する戦後補償を」と訴えた。

同様の集会はこれまで主として東京、大阪などで開かれており、地方都市では珍しい。岡山県評センター女性連絡会などの呼びかけで、市民グループの人たち約250人が参加、韓国のテ

テレビ局が従軍慰安婦問題について制作した「沈黙の恨（ハン）」も観賞した。

10月22日から約2ヵ月間、大阪市浪速区のリバティおおさかでは「朝鮮侵略と強制連行展」が開かれる。

期間中の11月9日には「いま、朝鮮人強制連行を問う - 」と題した集会が、12月初めにも同様の集会が予定されている。

「日本と韓国・朝鮮との友好のため、過去の歴史的事実を明らかにしよう」というのが同展のねらい。11月9日は吉田さんらが参加する予定だ。

朝日新聞虚報目録

平成3年（1991年）10月10日 木曜日

語りあうページ

従軍慰安婦 加害者側から再び証言

女たちの太平洋戦争

乳飲み子から母引き裂いた

「実際、既婚者が多かった」

「朝鮮人従軍慰安婦とは何だったのか。いまこそ明らかにし謝罪しておかないと日本は早晩、国際的に指弾されるだろう」。戦時中「山口県労務報国会下関支部」の動員部長として朝鮮人を強制連行した吉田清治さん（78）＝千葉県我孫子市＝はこう言って目を伏せた。吉田さんは5月22日の本欄で、加害者としての自分について証言したが、改めて胸中を吐露した。その間3時間余。紺色の背広に小柄なからだを包んだ吉田さんは「私ももう年。遺言のつもりで記録しておいてほしい」と繰り返した。（編集委員・井上裕雅）

従軍慰安婦問題について韓国の女性団体などが実態を明らかにすることなどを日本政府に要求しているが、日本政府側の態度は一向に前進していない。4月にはソウルの日本大使館で女性団体に説明があったが、「手がかりになる証拠はなく、強制連行した事実を認めることも、謝罪することも、蛮行を明らかにすることも、慰霊碑を建てることもできない」というものだった。政府は「民間の業者がそうした方を連れて歩いたとか・・・」というばかりだ。

「あれは業者がやったことだ」「調査は不可能」などという理屈が通るはずもありません。

旧日本軍人、軍属の多くは慰安所と慰安婦のことは知っているはずですが。ただ名誉なことではないので口にしないだけでしょ。

だが、元従軍慰安婦のほとんどは沈黙したままだ。加害者側が口をぬぐい、そして被害者側も過去を語ろうとしないケースが多い。従軍慰安婦とは何だったのかが歴史の闇(やみ)に埋もれる恐れさえある。しかし、吉田さんは、旧軍人、軍属の証言をまつまでもなく、慰安婦問題を明らかにすることはできるという。

南方から復員した軍人に聞いたのですが、彼女たちは負けいくさの中で戦場に放置された。保護なんてありえなかった。当然彼女たちは敵の捕虜になった。日本語を話す女性の集団です。スパイか破壊分子と思われたでしょう。日本軍の情報を得るためにも徹底的に調べられ、朝鮮半島から強制的に連行され、日本兵らの相手をさせられていた女性たちだ、ということがわかったでしょう。それらの調書はアメリカやオーストラリアで公文書として保管されていると思います。東南アジアの人たちもその実態は知っているでしょう。

各国ともいまそのことを明らかにすることはないでしょうが、人権感覚の鋭い欧米のマスコミが知ったらどうでしょう。黙ってはいません。そうなったら日本政府は国際的に言い逃れができません。

韓国の反日感情にも火がつきます。外務省は、いますぐにでも事実を認め、謝罪するべきでしょう。

慰安婦を乗せて南方に向かった御用船を含む船団が潜水艦にやられ、慰安婦と、彼女たちを受けとりにきた兵隊が亡くなったことがあります。彼らは靖国神社にまつられています。

従軍慰安婦問題は、さらに、国際政治に影響を及ぼす恐れがある、と吉田さんはいう。

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)とのことです。敗戦当時、旧満州、中国北部にいた慰安婦の多くはいま北朝鮮にいるはずですが。北朝鮮が彼女たちのことを調べたかどうかはわかりませんが、その気になれば調べられるでしょう。

北朝鮮がその問題を暴露したら日本政府はどうするのでしょうか。

それにしても慰安所、慰安婦に関する資料が少ないのは事実だ。「国がその存在をごまかし、今日に至っている」と吉田さんは話す。

当時、慰安所のことは報道禁止でした。軍事機密だったわけです。国際世論も考慮しなければならぬ。慰安所など帝国軍人としてもってのほかでした。陸軍士官学校、陸軍大学などを出たエリート参謀たちにしても感性に合わなかったでしょう。でも、民間の業者が運営するのは無理なことでした。

私は1943年(昭和18年)、1944年(同19年)従軍慰安婦を連行しましたが、「皇軍慰問朝鮮人女子挺身隊員動員に関する件」という軍命令がくるわけです。「年齢は20歳以上30歳ぐらい、既婚者も可、妊婦は除く、性病検査実施、勤務は2年間」となっています。それを受け取るとすぐ朝鮮半島の道(どう)警察へ「また何人頼む」と電話を入れます。2、3日後、15人から20人ぐらいで連絡船で出張すると、すでに予定表ができています。どこで1人から3人、どこで3人から5人、といったふうに地図に書いてある。1時間ほど打ち合わせをして道警察から各村の近くの警察へ連絡します。連行予定前日の夕方から近くの駅を封鎖し、道路も押さえてしまいます。情報がもれていると困るからです。

当日は朝8時ごろ幌(ほろ)つきの軍用護送車で出かけます。そして各家から全員外へ出させます。そのころになると村内は「また人さらいがきた」とパニック状態です。悲鳴があがり、犬がほえます。

私は男性も徴用しましたが、女性を強制連行したことはより罪深いと思います。子供のいた人は敗戦後帰郷してその子たちに会いたかったでしょうが、多くの人たちが日本列島の中などで暮らしていると思います。

残酷な行為は私がやったのです。そのことを黙ったまま死ぬわけにはいきません。

謝罪する以外に方法はないでしょう。そうしない限り、今後100年たっても韓国民との友好はありえません。

従軍慰安婦として強制連行されたのは主として未婚の女性というのが通説だ。が、吉田さんの経験によると、そうではなかったという。既婚者が多かった。だから、ことは余計に悲劇的で重大だと語る。

私が連行に関与したのは1000人ぐらいですが、多くが人妻だったのではないのでしょうか。乳飲み子を抱いた人もいた。3、4歳の子供が若い母親に泣きながらしがみついてもいました。そんな子供たちを近くにいる年をとった女性に渡し、若い母親の手をねじ上げ、けったり殴ったりして護送車に乗せるのです。母親を奪われた子供たちはいま4、50代ですよ。当時のことを忘れてはいないでしょう。きっと死ぬまで忘れません。そんな人が何千人も韓国にいるんです。

彼女たちを連行した日本人として私は「忘れた」「なかったことだ」などとは到底言えませんが、当時、子供だった人たち同様、私もあの現場だけは忘れることができません。

平成4年(1992年)1月23日 夕刊

窓 論説委員室から

従軍慰安婦

吉田清治さんは、昭和17年、朝鮮人を徴用するために設けられた「山口県労務報国会下関支部」の動員部長になった。

以後3年間、強制連行した朝鮮人の数は男女約6000人にのぼるといふ。

韓国の報道機関から「もし、わが国の国会で証言してほしいという要請があれば、どうしますか」と聞かれたとき、こう答えた。

「私は最も罪深いことをしました。証言しろといわれれば、韓国の国民、国会に対して謝罪し、そして何でも答える義務がある。その立場を自覚していますから」

記憶のなかで、特に心が痛むのは従軍慰安婦の強制連行だ。

吉田さんと部下、10人か15人が朝鮮半島に出張する。総督府の50人、あるいは100人の警官といっしょになって村を包囲し、女性を道路に追い出す。木剣を振るって若い女性を殴り、けり、トラックに詰め込む。

一つの村から3人、10人と連行して警察の留置所に入れておき、予定の100人、200人になれば、下関に運ぶ。女性たちは陸軍の営庭で軍属の手に渡り、前線へ送られていった。吉田さんらが連行した女性は、少なくみても950人はいた。

「国家権力が警察を使い、植民地の女性を絶対に逃げられない状態で誘拐し、戦場に運び、1年2年と監禁し、集団強姦(ごうかん)し、そして日本軍が退却する時には戦場に放置した。私が強制連行した朝鮮人のうち、男性の半分、女性の全部が死んだと思います」

吉田さんは78歳である。「遺言として記録を残しておきたい」と、60歳を過ぎてから、体験を書き、話してきた。

東京に住んでいたころは時折、旧軍人の団体や右翼が自宅に押しかけてきて、大声を出したりした。近所の人々が驚いて110番したこともある。

マスコミに吉田さんの名前が出れば迷惑がかかるのではないか。それが心配になってたずねると、吉田さんは腹がすわっているのだろう、明るい声で「いえいえ、もうかまいません」といった。

畠

朝日新聞虚報目録

平成4年(1992年)3月3日 夕刊

窓 論説委員室から

歴史のために

従軍慰安婦を強制連行した吉田清治さんの告白が、この欄(1月23日付)で紹介された。その後、たくさんの投書をいただいた。

去年、本紙と朝日放送が協力して進めた年間企画「女たちの太平洋戦争」にも、投書が相次いだ。担当者と話していて気づいたことがある。それは、日本軍の残虐行為はなかったとか、公表するなとかいう人の論拠には、共通する型がある、ということだ。

そんなことは見たことも聞いたこともない。軍律、兵隊の心情にてらしても、それはありえない。もし事実だとしても、それは例外で、一般化するの是不当である。なかには自己顕示欲や誇張癖のために、ゆがめられた話もあるだろう。

自虐的に自国の歴史を語るな。子孫たちが祖国への誇りを失ってしまう。それに、戦争が庶民を犠牲にすることは分かりきっている。過去を語っても無益。早く忘れよう。

日本軍の残虐行為を知ったら、遺族は、わが父、兄弟も加わったかと苦しむだろう。そのつらさを考えよ。また、戦友は祖国のために命を捨てた。英霊を冒瀆(ぼうとく)するな。

以上のように主張したい人々の気持ちはよくわかる。だれにも理屈だけでは動きたくない情というものがある。しかし、それだけでいいのか。自問せざるをえない。

朝日放送が投稿をもとにドラマを制作し、昨年末、朝日系列テレビ各局が放送した。劇中、高等女学校の生徒たちが兵隊の褌(ふんどし)を洗う場面があった。たちまち、抗議の手紙、電話である。

「帝国軍人が、女生徒に褌を洗わせるなどということは、断じてない」

大阪府下に住む投稿者が、母校に保存されていた学校日誌で記憶を確認した。

「陸軍需品支廠(しょう)ヨリ依頼ノ軍用褌、洗濯作業開始」

知りたくない、信じたくないことがある。だが、その思いと格闘しないことには、歴史は残せない。 畠

朝日新聞虚報目録

平成4年(1992年)5月24日

慰安婦問題

今こそ自ら謝りたい

連行の証言者、7月訪韓

「私が慰安婦たちを朝鮮半島から強制連行した」と証言している千葉県在住の吉田清治さん(78)が7月、韓国に「謝罪の旅」に出る。韓国側から次々と起こされる訴訟、遅々として進まない日本側の補償に、いてもたってもいられなくなった、という。元慰安婦たちとも対面する予定で、「残虐行為に直接かかわった日本人が謝罪に来た、という歴史を残したい」と話している。

吉田さんによると、1942年(昭和17年)「山口県労務報国会下関支部」の動員部長になり、国家総動員体制の下、朝鮮人を軍需工場や炭鉱に送り込んだ。朝鮮半島に船で出かけては百人単位でトラックに詰め込んだ。3年間で連行、徴用した男女は約6000人にのぼり、その中には慰安婦約1000人も含まれていた、という。

吉田さんは、こうした体験を「国会でもどこでも行って話す」つもりだが、参考人で呼ぼうとする動きが一時あったものの、いまだに実現しない。高齢で、今年しか謝罪のチャンスはないかも、という気持ちが、吉田さんを今回の旅へ駆り立てた。

吉田さんは、9年前にソウルの南、天安市にある海外同胞のための墓地、「望郷の丘」に碑を建てた。強制連行した朝鮮人へ謝罪の気持ちを込めたつもりだったが、一人だけの除幕式では、大勢の韓国人に囲まれ、ば声を浴びた。しかし、今回も望郷の丘で慰霊式をしたい考えた。「解放記念日」の1カ月前に当たる7月15日に予定している。韓国内で慰安婦問題への関心が盛り上がっているいま、9年前以上の「さらし者」になる覚悟はできている、という。

朝日新聞虚報目録

平成4年(1992年)8月13日

元慰安婦に謝罪

ソウルで吉田さん

ソウル 12 日 = 小田川興

太平洋戦争当時、山口県労務報国会動員部長として、朝鮮人慰安婦や軍人、軍属を強制連行したと証言している吉田清治さん（78）=千葉県我孫子市柴崎台=が 11 日訪韓し、12 日、ソウルの韓国プレスセンターで開かれた太平洋戦争犠牲者遺族会の「証言の会」に出席した。東京地裁に対日補償請求を訴えている元慰安婦の金学順さん（69）の前で頭を下げ、謝罪。金さんは「補償実現に力をささげてほしい」と訴えた。

朝日新聞虚報目録

平成 6 年（1994 年）1 月 25 日

政治動かした調査報道

戦後補償 忘れられた人達に光

慰安婦・強制連行・・・

戦後長い間、戦禍の責任をとるべき側から忘れられた人達（ひとたち）がいた。

旧日本軍に性の道具とされた従軍慰安婦、強制連行の被害者、海外の残留邦人・・・・・・。

近年になって急浮上したこれらの戦後補償問題に、朝日新聞の通信網は精力的に取り組み、その実像を発掘してきた。

隠れて生きるほかなく、実在が証明しにくかった従軍慰安婦を、マスメディアで具体的に語った先駆けは 1985 年 8 月のコラム「天声人語」だろう。千葉・館山の婦人施設にいた元慰安婦の願いで鎮魂の碑が建てられた話だ。しかし、元慰安婦自身の思いが詳しく書き留められるのは、それから 3 年後だった。

千葉支局の記者だった山之内玲子（31）=現・東京社会部=から「戦争体験の証言として忘

れてはいけないものを千葉版に書き残しておきたい」と、取材申し込みを受けた「ベテスタ奉仕女母の家」理事長の深津文雄さん（84）は「女の記者さんだから、嫌なことは聞かないよ」と取り次いでくれた。

その女性は、裕福なパン屋の長女に生まれたが、店が倒産し、借金のかたに身売りされた。一度、家に戻れたが居場所がなく、兵隊相手の「特要隊」の話に乗せられて4000キロ南のパラオ諸島へ。強制的に連れて来られた朝鮮人女性らと、毎日20人以上も相手をさせられる日々……………。

聞き取りは1日で終わらず、2日に及んだ。山之内は「つらいだろう」と相手をいたわりつつも、「いま記録しておかねば」との思いが強かった。

2年後の90年夏、日本政府は「慰安婦は民間業者が連れ回ったもの」と国会で答弁した。前後して千葉の施設に取材に来た韓国テレビ局のカメラの前で、元慰安婦は「証人に立とう。恥ずかしいことではない。名乗り出ておいでよ」と呼びかけた。

日本ジャーナリスト会議から「JCJ」賞を贈られた朝日新聞と朝日放送のメディアミックス企画「女たちの太平洋戦争」に、慰安婦問題が登場したのは、翌91年5月。朝鮮に渡って強制的に慰安婦を送り出した元動員部長の証言に、読者から驚きの電話が何十本も届いた。

読者同士の紙面討論が延々と続くかたわら、記者が朝鮮人慰安婦との接触を求めて韓国へ出かけた。その年12月、韓国から名乗り出た元慰安婦3人が個人補償を求めて東京地裁に提訴すると、その証言を詳しく紹介した。年明けには宮沢首相（当時）が韓国を訪問して公式に謝罪し、国連人権委員会が取り上げるに至る。

千葉の元慰安婦は、山之内記者への私信で、韓国の元慰安婦が重い口を開いたことや、補償への動きが見えたことを喜んでいたら、93年春に亡くなった。

元従軍慰安婦からの聞き書きが掲載された88年8月10日付の千葉版（キャプション）

韓国の元従軍慰安婦へ補償の動きが出たことを喜ぶ、元慰安婦からののはがき（キャプション）

」発掘 ペンの執念

「ウトロ」で韓国でサハリンで - 「過去」問う声探して

過疎の山奥でも離島でもないのに、1988年まで水道がひけなかった、京都府宇治市のウトロ地区（約2万1000平方メートル）戦争中、飛行場と軍用機を造る国策会社に集められた朝

鮮人労働者の建設宿舎跡だ。戦後、何の補償もないまま職を失い、帰国する金もない人達が残って、廃品回収業などで生きてきた。

その土地が住民の知らないうちに売り渡され、買い主から住民は「不法占拠」と立ち退きを迫られた。

ウトロ地区の中に、宇治支局（現・学研都市支局）の若い記者らが飛び込み、90、91年に社会面と山城版の連載で、都会の真ん中に隠されていた戦後を掘り起こした。

「ウトロの人間は他人の土地に勝手に来て家を建てた - という誤解を持たれたままでは、子供たちは誇りを持って生きて行けない」と訴える若い母親に、山崎靖（28）＝現・大阪社会部＝は胸を打たれたことを覚えている。

同じような強制連行で夫や兄弟を失った家族の思いを聞き取る勧告への旅に、90年8月、西部社会部員だった三ツ松千佐子（30）＝現・外報部＝は、同世代の女性通訳と2人で出かけた。戦時中、山口県の海底炭鉱災害が生んだ犠牲者名簿を手にしていて。

猛暑のなか、缶ジュースの手土産を持って、いきなり遺族の家に飛び込むポロシャツとジーパン姿の2人に、郡役場の職員が運転手役を買って出てくれた。そればかりか、「だれにでもあげられる物ではないが」と、戸籍のコピーも渡してくれた。

父親が出した死亡届を信じず、「遺骨が帰っていない兄はサハリンで生きているに違いない」と語る弟たち - 。三ツ松が書いた社会面の連載から半年後、地元山口の放送局も同じ手法でドキュメンタリー番組を作っている。

残留邦人はいない、とされていたサハリン。一時帰国のフェリーを取材し続けてきた稚内通信局長の前部昌義（34）は、91年9月、現地を訪れ、残された邦人がちょうど京都・ウトロの人達と同じように差別と貧しさの戦後を送ったことを知った。

93年、サハリンで新たに30人の残留日本人の存在が、民間の手で確認されている。

列島の南から北まで、そして海外にも張り巡らされた朝日新聞取材網のなかで、一人ひとりの記者が、多くの人びとに支えられながら活動を続けている。

朝日新聞虚報目録

平成3年（1991年）8月11日 日曜日

思い出すと今も涙
元朝鮮人従軍慰安婦
戦後半世紀重い口開く
韓国の団体聞き取り

ソウル10日 - 植村隆

日中戦争や第2次大戦の際、「女子挺身隊(ていしんたい)」の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた「朝鮮人従軍慰安婦」のうち、1人がソウル市内に生存していることがわかり、「韓国挺身隊問題対策協議会」(尹貞玉・共同代表、16団体30万人)が聞き取り作業を始めた。同協議会は10日、女性の話を録音したテープを朝日新聞記者に公開した。テープの中で女性は「思い出すと今でも身の毛がよだつ」と語っている。体験をひた隠しにしてきた彼女らの重い口が、戦後半世紀近くたって、やっと開き始めた。

尹代表らによると、この女性は68歳で、ソウル市内に1人で住んでいる。最近になって、知人から「体験を伝えるべきだ」と勧められ、「対策協議会」を訪れた。メンバーが聞き始めると、しばらく泣いた後で話し始めたという。

女性の話によると、中国東北部で生まれ、17歳の時、だまされて慰安婦にされた。200 - 300人の部隊がいる中国南部の慰安所に連れて行かれた。慰安所は民家を使っていた。5人の朝鮮人女性があり、1人に1室が与えられた。女性は「春子」(仮名)と日本名を付けられた。一番年上の女性が日本語を話し、将校の相手をしていた。残りの4人が一般の兵士200 - 300人を受け持ち、毎日3、4人の相手をさせられたという。

「監禁されて、逃げ出したいという思いしかなかった。相手が来ないように思いつづけた」という。また週に1回は軍医の検診があった。数カ月働かされたが、逃げることができ、戦後になってソウルへ戻った。結婚したが夫や子供も亡くなり、現在は生活保護を受けながら、暮らしている。

女性は「何とか忘れて過ごしたいが忘れられない。あの時のことを考えると腹が立って涙が止まらない」と訴えている。

朝鮮人慰安婦は5万人とも8万人ともいわれるが、実態は明らかでない。尹代表らは「この体験は彼女だけのものではなく、あの時代の韓国女性たちの痛みなのです」と話す。9月からは

事務所内に、挺身隊犠牲者申告電話を設置する。

昨年 10 月には 36 の女性団体が、挺身隊問題に関して海部首相に公開書簡を出すなど、韓国内でも関心が高まり、11 月に「同協議会」が結成された。10 日には、「韓国放送公社」(KBS) の討論番組でも、挺身隊問題が特集された。

(別紙)

〔謝罪広告の内容〕

謝罪広告 いわゆる「従軍慰安婦」について

株式会社朝日新聞(以下、当社という)は、第二次大戦終結後 37 年経過した昭和 57 年(1982 年)9 月 2 日以来、吉田清治の証言、すなわち、「私は、1943 年～1945 年に、軍命令により、済州島で、木剣を振るって若い女性を殴り、けり、15 人ほどの若い女性をトラックに詰め込み連行して慰安婦にした」等を真実であるとして「日本軍が、慰安婦を戦場へ強制連行したことは事実である」と朝日新聞紙上に報道し続けてまいりました。かかる吉田清治の証言は、東京裁判においても、日韓基本条約締結に際しても何ら問題にされていなかったにもかかわらず、当社は、この吉田証言を具体的で詳細であるという点だけに依拠して、客観的な裏付けをとることなく朝日新聞紙上に発表しました。

平成 4 年(1992 年)1 月 11 日、当社は「軍の関与を示す資料発見、政府見解揺らぐ」と標記したうえ、昭和 13 年 3 月 4 日付陸軍省から派遣軍あて通牒を「これこそ国の機関である軍が慰安婦募集に関与した証拠である」として、当社紙面一面トップに大きく取り上げたところ、証拠であるどころか、それとは逆に、日本軍が、「募集において悪徳女術などが誘拐に類する方法をとることがあるので、憲兵と警察は(悪徳売春業者を)取り締まれ」という内容であって、悪徳業者が「強制連行」しないよう軍が関与したことを証するものでありました。

しかしながら、この昭和 57 年(1982 年)の当社の発表以降、戦後 37 年間、「日本軍が、素人の娘たちを強制連行し、戦場に送り込み、無償で日本兵士たちの慰めものにした」という虚構が、全世界に広まってしまうこととなったのは、偏に、当社が 16 回にわたり、吉田清治の証言を繰り返し真実であるとして報道し続けてきたからであ

りました。

当社が報道し続けた吉田清治の虚偽証言が、国連クマラスワミ報告 平成 8 年(1996 年) 国連マクドゥーガル報告書 平成 10 年(1998 年)において日本軍による慰安婦の強制連行(日本軍による朝鮮人 20 万人以上の性奴隷化)の論拠とされたのであります。

当社は、吉田証言を裏付ける証拠として、インドシナにおける日本軍兵士によるオランダ人婦女子への強制売春をとりあげましたが、このスマラン事件(白馬事件)は軍紀違反として、慰安所は軍の命令で閉鎖されたのであり、これは、むしろ、『『国家・軍の命令』によって強制連行したわけではない』という事実を証明するものであります。

当社は、昭和 57 年(1982 年)から 32 年も経過した昨年に至り、ようやく、吉田清治氏の証言は虚偽であることを確認しました。また、朝鮮半島において、日本国軍及び日本国政府が、軍ないし政府の方針として、暴力を用いて朝鮮人の女性を慰安婦にしたという事実はなく、慰安婦は民間業者が集めた売春婦であったことを確認いたしました。

これらの事実に反した報道により、日本国及び日本国民の名誉を毀損したことを深く謝罪するものであります。また、大韓民国国民と日本国国民の間の円滑な関係に障害を生じさせたことについてここに深くお詫び申し上げます。

株式会社朝日新聞社
代表取締役 渡辺雅隆

〔謝罪広告の条件〕

全 5 段

見出しは 14 ポイント以上、本文は 10 ポイント以上の活字による。